

No.3120

「モンゴル人にとってラクダとは何か？」ゴビ砂漠における  
ラクダの多元的価値創造と牧畜文化の再構築：1940-2020

総合研究大学院大学 文化科学研究科 博士後期課程  
WU WUYUNGA

本研究の目的は、中国内モンゴル自治区アラシャー盟においてラクダ放牧を続けるモンゴル族を対象とし、(1) 1940年代から現在に至るまでのラクダの飼育技術や利用形態、認識体系を通時的に明らかにするとともに、(2) 同時代軸における国家政策や社会的な状況、自然環境といった環境の変化もまとめる。そのうえで、(3) 上記のミクロとマクロの視点からラクダ牧畜民の生計戦略や飼育技術、ラクダとの距離のとり方などを明らかにし、従来問われることがなかった人とラクダとの関係をめぐる民族誌を完成させる。すなわち、本研究は人と動物に関わる先行研究にラクダの事例を新たにくわえ、理論的見解を提供するものである。

上記の研究目的を達成するため、申請者は中国で「ラクダの故郷」と呼ばれ、ラクダを最も多く飼育しているアラシャー盟に調査地を設定した。申請者は2021年3月から2022年4月までの一年間、アラシャー盟においてラクダ牧畜の動向や牧畜民の放牧技術などに関わる現地調査を実施した。調査方法としては参与観察や聞き取り調査と文献調査などである。特に、現地調査では50 - 90歳の年齢層のラクダ牧畜民を対象にし、彼らのライフヒストリーを収集した。それによって、1940年代から現在に至るまでの中国の社会・自然環境の変化やラクダ牧畜業の変容を明らかにした。

調査の結果、大きく以下の三点を明らかにした。①1940年代から現代にいたるなかで、家畜の所有権は私有から集団共有になり、再び個人所有になったこと、②飼育する家畜の構成は集団化政策の実施により複数種から単一種になり、改革開放後には複数種あるいは単一種を飼育するなど大きな変化があったこと、③ラクダの利用については、集団化時代まではラクダの隊商や畜産利用が重要とされていたが、1983年からは隊商がなくなり、そのうちラクダ乳などの畜産品の需要が増大するなかでラクダ飼育も盛んになってきたことがわかった。

今後の課題として、ラクダ牧畜業における最新科学技術の導入や運用の状況について調査をする必要がある。